

佛國の學生

黒田清輝談

編者曰、氏は子爵黒田清綱氏の嫡子にして、明治十七年佛國に學び、多年繪畫を研究し、明治二十六年歸朝、東京美術學校教授に任ぜられ。傍ら白馬會を組織して洋畫の發達進歩を計り、今や斯道の泰斗として名聲嘖々たり。

佛蘭西の中學生の氣風を話せと云ふのですか、佛蘭西の學生と云つて、大體に於ては何も格別日本の學生と異つたこともありません。私が佛國へ行つたは明治十七年の春で、其時十七歳であつたが、それから中學に三年、畫の研究に七年、都合十年居ました、歸つたのは明治二十六年ですから、其時分と今日とは少しは異つて居るかも知れないです。何んなことを云へばよいか、とにかく私の留學中氣の付いて居ることは、お尋ねに應じて話して見ませう。

巴里の中學ですか、巴里の中學校とでも云ふべきものは、一はリツセエと云つて官立の學校、これは少數ではあるが建物が宏大で生徒も澤山收容して居るです他の多數の中學は私立で、其中有名なのにスタニスラスといふのがある又市中にアンスチチューションといふのが澤山あります、スタニスラスは東京の曉星學校が其式でやつて居る、私の初めに這入つたのはアンスチチューションの方であつた。此の學校の生徒は寄宿と通學と兩方あつて、寄宿費は割合に安いから、家あまり豊でなく、生計に追はれて子供の世話に手の行き届かぬやうな者等の子弟は往々寄宿して居るです、又學齡に達しない小兒も這入つて居て、大きい者には二十歳前後の者も居た。學齡未滿の小

兒等は自宅を下らない眞似をして遊んで居る代りに學校に寄宿して居るのだから寝たり起きたりは皆他の生徒と同じやうにして居るのだが別に學課があるのでないから授業時間には只教場に居て何か勝手なものを書いたりなんかして居る許だ運動時間には勿論運動場で他の小さい者共と一緒に遊ぶ又は等の小兒には教師始め一般生徒等が目をつけてやつて随分可愛がつて居る様子であつた被物^{きもの}其他の世話は學校に一人年寄の女が居て其女がやつて居た此女は總の寄宿生の洗濯物などの世話役で有つた、私は後にリツセエの試験を受けて文科の五年級へ這入つたが、其級には十四五歳の生徒が多かつたと覺えて居る。中學程度の修養を経て、大學へ這入るには、バカロレアの試験といふのを受けて、其資格を造らねばならぬことになつて居るです。

寄宿生活の状態を云へば、凡べて寄宿生は日曜日終日と、木曜日の午後半日との外は外出を許されない、(成績の悪い者になると、右の兩日といへども出られない)外出の場合には一々學校で渡す紙の札を持つて行くことになつて居て、歸りには何時に歸つたといふ保證人からの證明を書いて貰つて來ねばならないです。寄宿舎では毎朝五時の起床で、それから服を着けたり顔を洗つたりするのに十五分間與へられる。食物は朝はソップとパンです其ソップはバターで葱を煮りつけ、それに湯を加へ鹽で味をつけて、これに前日のパンが切つて入れてある位なもので、至てまづいものである、パンは一人前四半斤位づゝ渡る、それを運動場へ持つて出て噛るといふやうな有様です。

授業の始まるのは八時、それまでは自修時間で各々教場で勉強するです、授業は午前は十二時まで、午後は又一時から四時まであつて、夕食後は又自修時間で、九時に寝る其時まで起て勉強するです。各級一人づつ舍監を兼ねた教員があつて、晝夜とも寄宿生の監督をする傍、作文とか何とか主に文學に關した課業を受け持ち、理化學

とか、繪畫とか云ふやうな課は、それぞれ専門の教師が、外から通つて来て教へるです。右の舎監を兼ねた教師は、寝るにも寄宿生の側について寝るのです。私は寄宿して居たが、普通の學課の外に別に佛語を習ひ、又食事を教師と同等にして居たから、特別寄宿生といふ譯で、一ヶ月百五十法(フラン)(其頃の日本の金にして凡三十圓)を取られたのであつたが、此の種の生徒も他に二三人居た普通の寄宿費は至て少額でありました。

私の居たアンスチチューションでは各生徒の卓子が随分大きく抽屉も中々深かつた。これは丁度生徒の倉庫のやうなもので、書物だの手帖だの筆だの、其他いろいろの物を入れ、蓋には錠を卸し、銘々その鍵を持つて居て、授業の時にあけるといふことになつて居たです。ところが其中に何か不都合なもの、例へば小説本(小説を讀むことは禁じられてあるので)でも入れて居るといふ嫌疑でも受けると、教師の面前で蓋をあけさせられて検査せられることがある、若し實際不都合な物を入れて居た場合は、こんな時随分困るのです。尤も教師も大概の事は寛大に見て置きます。私が居た時分に、通學の生徒が蠶種こまねを持つて来て、それを同級生等に配與わけて、桑葉はやはり通學生が毎朝持つて来て、銘々が卓子の中で少しづつ、蠶を飼ふといふやうな娛樂をやつて居たが、そんなことは教師は知らぬ風をして居て咎めなかつたです。

遊戯ですか、私がアンスチチューションに居た時分には、一週一回は兵式體操を課してあつたです、生徒の遊戯は至つて無邪氣な方で、テニスとかフットボールとか云ふものよりは、鬼ゴツコとか或は只掬の投げツコのやうなことをやる、ビーユ(小球の義)といふ彈球を地上で弄ぶことが流行して、どの生徒のポケットにも大概これが這入つて居ないことはなかつたです。

夏季は毎週一回學校からセイヌ河へ水練の稽古に行く規定で、これは寄宿生も通學生も一緒で、教師が引きつれて行くです、私の居た學校は巴里の北の方であつたが、城外のセイヌ河の上流へ出るには、三十分もかゝつたです、其間はすべて場末のきたない道であつたが、年中校舎内に居る者には趣が變つて面白く、皆遊山にでも行くやうに喜んだものです、途中は二列になつて歩くんですが、道側の店屋で馬鈴薯の揚げたのを賣つて居るのを、列を離れて一錢二錢で買つて食ひながら行くですな、こんなことは不體裁のやうだけれども、一體西洋人は往來で物を食ふことを決して卑しまない、紳士でも物を食ひながら歩くといふとはよく見受けることだ、又立派な貴婦人が菓子屋などの前に立つて見とれて居るなどは常のことです。學生でも中學生に限らず、大學生でも朝登校の時などにパンを食ひながら歩くことが多いです。

師弟の關係、それは今の日本の學校の師弟間よりはもつと密接して居て、師の方でも生徒を愛し、生徒の方でも師を尊び一旦師弟の關係があつた中には、いつ迄も互ひに懐かしむといふ情誼が深いです。私が巴里の博覽會に行つた時、私が居た學校の校長であつた人に招かれて馳走を受けたマがあつた、以前同窓生であつて其時巴里へ來て居た主なる人々は皆共に招かれたが、中に米國人で其時米國の事務官長代理となつて來て居た人があつたです。其時校長は私どもが昔の失策話などとして興じ、紀念として私にはパイプを一本くれました。昔お世話になつた時分には煙草は喫まれましたが、(學校では煙草は嚴禁)到頭今では私も先生からパイプを戴くやうになつたと云つて笑つたことです。

學生の氣風は概して云へば、日本のよりは温順おとなしく、喧嘩をすると云ふことは至つて希で、殊に同輩間で喧嘩す

ると云ふやうなことは先づ無いと云つて可いです。茲に一寸日本の學生など、異つて居るのは、泣き易いことで、大きい奴がワイ／＼泣くです。教師に口返答をしたとか、成績が悪いとか云ふやうな時、叱られたり撲られたりすると直ぐ泣くです、私どもの居た學校の教師は癩癩持ちであつたから、横ズツポウを撲るとか、耳を引張るとか云ふことは時々やつたもので、この耳を引張るのは重に席から引出して壁の側で立たせる時にやるです。

生徒同士は概して交情なかの睦ましい方で、普通の人情として教場で隣席に居るのは殊に親しい。中には各國の郵便切手を集めるのを樂しみにして、珍らしい切手が貰ひたさにお世辭を振りまいて親しくして來るものもあるです。外國から來て居る學生に對しては、始めの中は多少は輕蔑する氣味があるが、それは暫しの間で、馴れてくれば、同國人よりも珍らしい處があるから、却つて殊に親密に交際するやうになります、街道みちなど一所に歩いて居る時、人が同輩の外國生を嘲弄するやうなことがあると側から怒るのです。言語ことばも同じやうに話せるやうになると、もう外國人といふ觀念はなくなるです、只初めには外國人と見ると随分無禮なことをすることがある、あまり失敬な事をするから私が喧嘩をしたことがあるです。それはリッセエへ這入つた時で……私は初めアンスチューションに一年餘り居て後にリッセエに轉じたですが、畫の研究に従事したのはズーツと後の事です、學校の寄宿舎に居れば、校中の生徒一同と親睦になるのですが、通學して居れば級クラスが違ふと親睦が少く、同級の者とは親しくなつても、外の級の者が、支那人と云つて冷笑ひやかしたりなどすることがあるです。私がリッセエに這入つた時も他級の生徒等が私を支那人と云つて時々嘲弄し、或時私が登校の場合を、五六人の他級生が道に待ち受けて居て雪玉を投げつけたです、皆上級のものです、其中一番大きいのが十七歳位であつた、いま／＼しい奴とは思つたが、學校へ急ぐ場

合であり、其日は其儘に通つた。ところが翌朝になると、又待ち受けて居つて雪玉を投げるです、温順しくして居れば、次第に増長するから、這奴は一つ懲らして置かねばいけないと思つたから、突如駈け寄つて、一番大きいのを掴まへようと、逃げるのを追かけ丁度向うが袋町になつて居て、其角の處で掴まへ雪の中へ投げつけたです。奴等は随分腕は強いが、腰が弱いから此方が強かつたです、これに懲りたと見えて、其後は悪戯をするやうなことはさつぱりなくなつたです。

併し概して云へば、佛國人は外國人を輕蔑すると云ふやうなことは少ないですな、私は田舎に三年ばかり借家して棲んで居たことがあつたが、土地の者等は其土地の紳士に對すると同様に敬意を表して、別に外國人だからといふ隔意は更になく、百姓などでも無禮の舉動を示すやうなことは決して無かつたです、小學校の小供等まで途であふと必らず禮をする、一體田舎の小學校の生徒は途で見知らぬ人に逢ば必らず禮をします。

師弟間の衝突、同盟休校など、云ふやうなことも随分ないでもありますが、私が中學に居た時分には、其學校ではそんな事は殆んど無かつたです、二年許も居た間に唯一寸不穩の事があつたそれは或日曜の晩のことで、一體夜は九時半に寄宿舎へ歸るが規則で又寝れば談話をせられぬことになつて居るのに、其晩は歌を唄つたり、口笛を吹いたりして噪ぎ、校長や教師等が立腹して、ひどく叱りつけて居たことがあつたですこれは皆他級生で、別室のことであつたから詳しい事は判らなかつたが、何でも教師に對する不平から起つたことらしかつたです、唯一度這んなことがあつたきりで、外には一度も不穩の事を見聞しませんでした。

美術學校ですか、美術學校は巴里には随分多く、世界各國から美術の研究に來て居る學生が澤山なものです、

官立の美術學校は巴里に一つしかなく、これは繪畫、彫刻、建築を重に教へるやうになつて居るが、他の多數の私立美術學校は、繪畫とか、彫刻とかを、それ／＼専門に教授して居るです、美術生と云へば他の學生とは少しく風體などが違つて居る。一體美術學校には、一種の變つた舊慣があつて、學生の間で、他から見れば随分亂暴と思はるゝことをやつて居ることもある、例へば新入生があると酒をおごらせるとか又時には新入生を教場内で小使のやうに使役するとか云ふことがある、是等の事は私の教師等の學生時代には最も盛に行はれたものだから、私の頃にも随分面白い事がありました、併し今日ではもうあんまりやらないそうです、美術學生は諸國から來て居るが、其中で米國人が一番多く、米國人の三四人から十二三人も居ない美術學校はない位で、私の歸る時分でも、米國から美術研究に來て居る者が巴里に六七百人はをるといふ話でした、今ではなかく／＼そんなことではきかぬでせう。

私ですか、私は前申した通り巴里で七年間畫を研究しましたが、其五年目にサロンに始めて出品することが出來ました。初めは畫を學ぶ積りでなかつたからアンスチューションやリツセエに這入つたです。若し最初から畫を研究する目的であつたら、別に三年間も佛語や羅甸語などを學ぶにも及ばなかつたのですが……併し語學を最初にやつて置いて損はありませんでした美術學生は他の學生よりは一體に先づのんきな方ですな、けれども美術學生と云うても大概皆リツセエ卒業程度位の素養のないものではありません、日本の美術家よりは、概して云へば學力の程度が上に在るやうです、又一體に彼地の學生は腕力は強い方ですが、畫學生などは殊に強く、私どもは片手で二十キロ（二キロは二百六十六匁）位の重量しか能う差し掲げないのに、其位のものには彼等には容易なこと

です。

先づ佛國學生の氣風を概括して云つて見れば、溫順の方で、そして愛國心には富んで居るです、愛國心の養成と云ふことに就ては、教課書の上にも大に意を用ゐてありますが、教師に於ても、努めて愛國心の啓發に心がけ、自國の歴史を尊び、自然愛國心の盛んになるやうに教授するです、されど元來共和國のことであるから、日本などは違ふところがあつて、つまり國を無形の神として尊ぶやうに教へ込むのです。

『中學世界』八一 明治三八年二月

本文献の回想は、明治一七年三月二二日から翌年一〇月まで、黒田が留学直後に籍を置いたパリ、バティニョール街のアンステイテューション・ゴッファール Institution de M. Goffart, Boulevard des Batignollesが明治一八年一〇月から二二月まで在学したパッシー街にある官立中学校(リセー・ジソン・サイイ)の文科第五級での体験に基づいている。この時期の黒田の活動については、隈元謙次郎「滞仏中の黒田清輝上」(『美術研究』二〇一 昭和二五年五月)を参照。